

主要部パラメタとその周辺*

本 田 謙 介

The Head Parameter and Related Matters

HONDA Kensuke

Summary

The head parameter as an essential part of linguistic knowledge is one of the topics most often discussed in generative grammar. We introduce the mechanism of the head parameter proposed in Honda (1999, 2002), from which a number of differences between SVO and SOV languages are automatically derived. Taiwanese and German are, however, apparent exceptions to this approach. This paper then gives some possible explanation for these exceptions in terms of the interaction between Universal Grammar and Particular Grammar.

1. はじめに

自然言語の語順は多様であるが、ほとんどの言語は「主語－動詞－目的語」(SVO) か「主語－目的語－動詞」(SOV) の言語群に属している。¹ 前者の例として英語が挙げられ、後者の例として日本語が挙げられる。人間の子供が成長の比較的早い段階で、しかも少ない経験から言語を習得する事実を上手く捉えるためには、人間には生得的に言語能力が備わってい

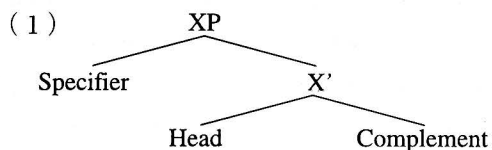
* 本論文の原稿を読み、細部に渡って有益なコメントをしていただいた獨協大学大学院の水口学氏に感謝する。なお本稿の不備に関する責任は全て筆者にある。

¹ 次いで VSO 言語も多いが、この語順は基底の SVO から V 移動によって派生されたとする分析 (Koopman and Sportiche (1991)) があることから SVO 言語の一部として分類することも可能であろう。Koopman and Sportiche (1991:221) は、SVO/VSO の 2 つの基本語順を許すアラビア語における、主語と動詞の人称・性・数の一致現象の非対称性に着目した。VSO 語順の場合、動詞は 3 人称単数というデフォルト (default number agreement) の形しか取らないが、SVO 語順の場合主語と動詞の一致が見られる。この事実は、VSO の場合は Infl への V 移動のみ起こるため VP 内主語との Spec-Head 間の照合 (Checking) が起こらないが、SVO の場合は VP 内部から主語が Spec-IP に移動することによって Spec-Head 間の照合がおこることで説明できる。

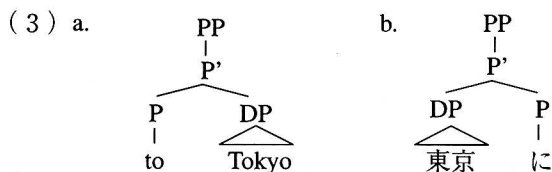
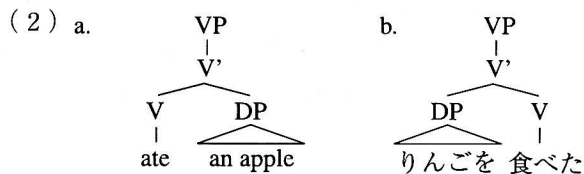
と考えるのが妥当である。この言語能力の中には、言語の基本語順を決定する非常に制限的ではあるが選択の余地を残すメカニズムが含まれているはずである。本論文はそのメカニズムを追求し言語能力の一端を解明することにある。以下第2節では Honda (1999), 本田 (2002) で提案されたパラメタを紹介し, SVO 言語と SOV 言語の統語的な相違が原理的に説明されることを示す。第3節では第2節で挙げた分析にとって一見問題となるような現象を考察しその説明を試みる。第4節では普遍文法のパラメタと個別言語の文法規則との関係について言及しつつ本論文をまとめる。

2. 主要部パラメタ

従来、いわゆる原理とパラメタのアプローチ (principles and parameters approach, とりわけ Chomsky 1981, 1986) では自然言語の句構造は全て (1) のような構造を持ち、語順に関する言語間の相違は主要部パラメタ (Head Parameter) という概念を使い説明されてきた。



主要部パラメタは英語のような主要部先頭 (head-initial) 言語では、主要部 (head) が補部 (complement) の左側に現われ、日本語のような主要部末尾 (head-final) 言語ではその逆で、主要部が補部の右側に現れることを決定する。さらにこのパラメタがもたらす重要な帰結として VP 内における head (動詞) と complement (目的語) の語順は他の範疇内 (例えば PP) でも同様であることが示せる。(2) (3) を見られたい。



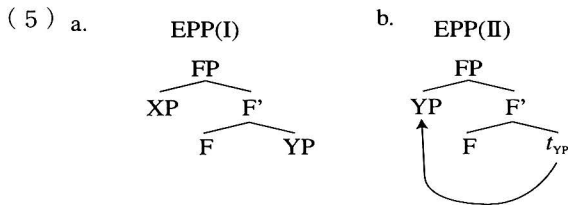
このような考え方は語順に関する範疇間の平行性を適切に捉えている点で優れているが、(a) 主要部パラメタの設定は具体的に何によってなされているのか？、(b) SVO言語とSOV言語における主要部と補部との構造は本当に鏡像関係にあるのか？といった重要な問題が残る。

この2つの問いに対してHonda (1999)・本田 (2002) では、(a) 従来の主要部パラメタとは機能範疇を持つEPPの値がもたらす帰結の一部であり、(b) 主要部・補部構造においてSVO言語とSOV言語は鏡像関係にない、という答えを与えている。² 以下本田 (2002) を簡単に紹介する。

本田 (2002) ではKayne (1994) を採用している。原理とパラメタのアプローチでは(1)のような構造を原始概念 (primitive concept) として仮定していたが、Kayne (1994) は(1)を「線形対応の公理 (Linear Correspondence Axiom) (以下LCA)」から導き出す統語的反対称性仮説 (Syntactic Antisymmetry Hypothesis) (以下、反対称性仮説) を提案した。³ LCAを仮定すると、自然言語の句構造が全て(1)の構造を持つので、日本語の語順 (Spec-Complement-Head) はさらなる移動によって派生されることとなる。この移動を引き起こすものとして(4b)のようなEPP (II) を提案した。EPP (II) はEPPの2つの種類の内の一方であり日本語のようなSOV言語を生成する。他方EPP (I) は主に英語のようなSVO言語を作り出す。各EPPによって派生される構造は概略(5)のようである。

(4) EPP: 機能範疇のSpecを埋める2つの形式

- a. EPP (I) : relevant な素性を X^0 に持つXPをSpecに移動 (Move),
あるいは併合 (Merge) する。…………… (英語等のSVO言語)
- b. EPP (II) : complementをSpecに移動する。…………… (日本語等のSOV言語)

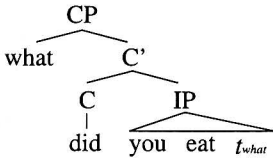


² Honda (1999) と本田 (2002) では細かい点で分析が異なっている。Honda (1999) では以下に挙げる (5 b) のYP移動の動機を、機能範疇の主要部Fを持つ主要部パラメタに関する素性 (F_{HP}) に求めた。つまり (5 b) タイプの言葉は機能範疇に F_{HP} を持つためYPのSpec-FPへの移動が駆動されると分析した。

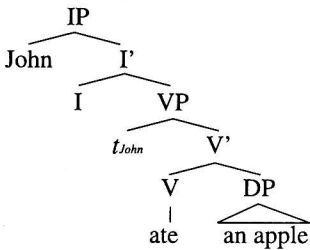
³ 詳しくはKayne (1994) 参照のこと。

自然言語はEPP (I) か (II) に基づいて基本的な句構造ができあがっていると仮定する。ここでEPP (I) 言語である英語と比較しながら, EPP (II) 言語である日本語の構造を見ていくことにする。^{4, 5}

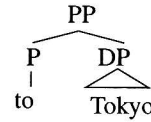
(6) a. What did you eat? (CP)



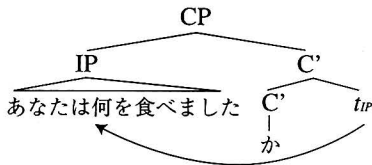
b. John ate an apple. (IP)



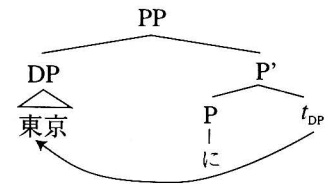
c. (I went) to Tokyo (PP)



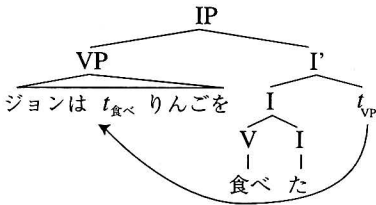
(7) a. あなたは何を食べましたか? (CP)



c. 東京に (行きました) (PP)



b. ジョンはりんごを食べました。 (IP)



⁴ 日本語には英語・フランス語等に見られるような屈折辞 (Inflection) は存在せず, 時制 (Tense) を表す接辞が存在するのでI (nflection) P よりむしろ T (ense) P と表示すべきであるが, 本論文では諸言語の基本語順の比較検討をすることが主目的なので便宜上 IP とする。

⁵ 日本語の DP (関係節) 内も EPP (II) による移動 (DP-Spec への IP 移動) が関与する。しかし構造がより複雑になり, 詳しい説明が必要となるためここで DP の構造は省略する。本田他 (1996), 本田 (2002) を参照されたい。

EPP の値 (value) は、当該言語の全ての機能範疇 (functional category) 内において一定であり、且つ EPP による移動は強制的で随意的ではないと仮定すると、日本語では EPP (II) のために全ての範疇の投射内で補部の Spec への移動が (7) のように行われる。その結果日本語の語順が決まるが、それと同時に SOV 言語に見られる類型論上の特徴 (例えば「SOV 言語は後置詞を持つ」等) に対する説明も可能となる。さらに (6) (7) のような構造上の相違が、つまり鏡像関係にはないことが、SVO 言語と SOV 言語に見られる多くの相違点 (wh 移動の有無等) に対する原理的な説明をも可能にする。詳しくは本田 (2002) 参照。

以上のことから EPP パラメタは、従来の「主要部パラメタ」の役割を担うのみならず、従来の主要部パラメタでは予測できない様々な類型論上の特徴を説明できる。しかしこのパラメタにとって一見問題となるような言語がある。それらの言語では EPP の値が全ての機能範疇で統一されていない。より正確に言えば、EPP (I) 言語であると思われるのにもかかわらず、一部の機能範疇においては EPP (II) 言語のように振舞っている。第 3 節ではこのような言語の例として台湾語とドイツ語を取り上げ、詳しく検討する。

3. 「問題となる」言語群とその説明

3.1 台湾語

台湾語 (台湾方言) は中国語の一方言であり基本語順として SVO をとる。⁶ この言語には声調連声変化 (tone sandhi change) という現象があり、この現象は統語構造と密接な関係にあることが Simpson and Wu (2002) により報告されている。以下ではまず Simpson and Wu の観察及び分析を概観した後、主要部パラメタとの関連から私見を述べたい。

まず声調連声変化について簡単に説明する。⁷ 台湾語は声調言語であり 8 つの声調を持つ。声調は語彙的に決定されているが、他の声調を持つ音節が「同一の声調連声領域 (tone sandhi domain)」に生起すると声調連声変化を起こす。例えば (8) のように声調 3 を持つ音節は他の声調を持つ音節と同一の声調連声領域に入っているため声調 2 に変化する。⁸

- (8) **khi3** pak8kiang1 -> **khi2** pak8kiang1
 go Beijing
 'go to Beijing'

⁶ Simpson and Wu(2002:69-70)は、台湾語が主要部先頭 (head-initial) 言語である証拠として (i) を挙げた。

(i) a. [_{VP} V [_{DP}]] b. [_{PP} P [_{DP}]] c. [_{IP} AUX I⁰ [_{VP}]] d. [_{AspP} Asp [_{VP}]]
 be chhe tui A-sin e lai A-sin leh khoa chheh
 buy books to Asin will come A-sin ASP look book
 'buy books' 'to Asin' 'will come' 'A-sin is reading'

⁷ 詳しくは Simpson and Wu (2002) 参照。ここでは後の議論に最低限必要な情報しか記述しない。

⁸ 以下に挙げる台湾語の例文、一般化及び分析は Simpson and Wu (2002) による。

以下の議論では変化する声調の種類は関係がなく、むしろ変化があったかどうかが重要となるため、声調変化の起こった音節に「●」記号を付与し変化の生じない音節と区別することにする。

まず声調変化が起きている例を挙げその環境をまとめる。(9)を見られたい。

(9) a. V-NP_{object}

be• [ling•pun• chhe]

buy two-CL books

'buy two books'

b. P-NP

tui• [goan• lau•pe]

to my father

'to my father'

(9) は主要部 (head) とその補部 (complement) の関係にある場合で、主要部の最後の音節は声調変化を起こしている。一方 (10) に見られるように指定部 (specifier) と主要部の関係にある場合は指定部の音節は声調変化を起こさない。

(10) [A•-sin] u• lng• chhing• kho

A-sin have two thousand dollar

'A-sin has two thousand dollars.'

(10) の[A•-sin]はSpec-IPを占める主語であると考えられ、後続に声調を持つ音節が生起しても、それが指定部にとっての主要部である場合には声調変化は生じない。

さらに (11) の様に文末では声調変化は起こらない。

(11) A•-sin chin• ho. A•-hui ma• chin• ho.

A-sin very good A-hui also very fine

'A-sin is very well. A-hui is also very well.'

以上をまとめると次のような一般化が得られる。

- (12) a. 主要部－補部の関係にある場合、同一の声調連声領域にあり、補部の左側に隣接する主要部の最後の音節は声調変化を起こす。
 b. 指定部－主要部の関係にある場合、同一の声調連声領域にはなく、主要部の左側に隣接する指定部の最後の音節は声調変化を起こさない。
 c. 文末では声調変化は起こらない。

(12) を考慮に入れて (13) を考えてみよう。

(13) a. A•-hui siong• kong• A•-sin m• lai

A-hui think KONG A-sin NEG come

'A-hui thought that A-sin was not coming.'

b. A•-hui siong• A•-sin m• lai kong•

A-hui think A-sin NEG come KONG

'A-hui thought that A-sin was not coming.'

左の *kong* は *siong* ‘think’ の補文 (CP) の主要部にあり随意的である。(15) の構造で (*kong*) となっているのはこのためである。

Simpson and Wu の分析は一見例外的な (13b) のような例に対し, Cyclic Spell-Out 及び IP 移動を仮定することにより見事に説明を与えている。ところで, この IP 移動は第2節で導入された EPP (II) による IP 移動と同一の移動であろうか? つまり (14b) – (14c) の移動の動機が EPP (II) によるものか否か? 第2節で見た通り EPP による移動は強制的で随意的ではないので, もしこの移動が EPP (II) によるものであれば, 例えば何故 (13a) には補文内で IP 移動が起こらないのかが説明できないばかりでなく, 何故 (16) の補文内で IP 移動を起こした (17) が非文であるのかが説明できない。¹⁰

- (13) a. A•hui siong• kong• A•sin m• lai
A-hui think KONG A-sin NEG come

- (17) *A•hui siong• A•sin m• lai kong• kong•
A-hui think A-sin NEG come KONG KONG
‘A-hui thought that A-sin was not coming.’

以上のことから (14b) – (14c) の IP 移動は EPP (II) によるものではなく, 別の動機付けによるものであると考えるのが自然である。例えば Simpson and Wu はその動機は “defocusing” によるものであると主張している。つまり文末の *kong* に焦点を置き, 「残りの」IP を脱焦点化 (defocus) するため (あるいは IP を話題化 (topicalize) するため) に移動を行うというのである。

ところで英語にも (18a) から (18b) のように IP を移動する変形がある。¹¹ しかしながら台湾語に見られる Spec-CP への IP 移動とは性質が異なっている。

- (18) a. I believe that John is honest.
b. John is honest, I believe (*that) .

¹⁰ 例文 (17) の文法判断は, Andrew Simpson (個人的談話) による。この文法判断を始め, 筆者の台湾語文法に関する質問に快く答えて下さった Andrew Simpson 氏に感謝する。

¹¹ Ross (1973:134) はこのような変形規則を Slifting (= Sentence lifting) と呼び以下のような規則を提案した。

Slifting

$$X - [s \ Y - [s \ that \ -S]s]s \ -Z$$

$$SD : 1 \quad 2 \quad 3 \quad 4 \quad 5 \quad \text{OPT} \Rightarrow$$

$$SC : 14\# [s \ 2 \quad 0 \quad 0 \quad]s \ 5$$

簡単に言うと Slifting は埋め込まれた S (= IP) を移動し上位の S に付加する移動規則であり, その際補文化辞は強制消去される。Slifting は随意的規則であり, この点において義務的規則である EPP による移動とは異なると言える。

なおフランス語には (i) のような例が見られる。

- (i) Vous buvez de l'alcool, je pense?

you drink the alcohol I think (原野 (1993:16) からの引用, 英語のグロスが筆者)

(i) が Slifting によって派生されたか否かは議論の余地があるが, 仮に前者が正しいとすると, 通常は補文化辞 ‘que’ の省略を許さないフランス語でさえ (i) では ‘que’ を落としていることから, Slifting の定式化のうち少なくとも SD 3 → SC 0 という操作は英語以外の言語でも起こりうる, より一般性の高いものであると言える。

英語において IP が移動する際には姉妹関係にある C^0 (that) を削除しなければならず、しかも移動の対象となるのは補文内の IP である。一方台湾語は先に見たように C^0 (kong) を残したまま IP 移動でき、移動の対象となるのは主節の IP である (cf. (14))。つまりこの種の移動は言語ごとに性質が異なるため、個別言語による規則が関与していると考えるべきであろう。

このように同じ IP 移動であってもその動機は様々であると言えることから、本論文では当該言語の基本語順を決定する EPP (II) による IP 移動の他に、各個別文法特有の動機による IP 移動も存在することをしっかりと認識した上で、移動現象全体を分析するべきであると主張したい。換言すると移動現象を捉えるためには普遍文法と個別文法の原理・規則を十分整理した上で分析しなければならないと言える。

以上 EPP (II) 以外の IP 移動の例を見てきたが IP 移動だけが特別なのではなく、次節で見るように IP 内における VP 移動も個別言語の文法が関与している場合があることを、ドイツ語の例を用いて示すことにする。

3. 2 ドイツ語

ドイツ語は主節と従属節とで語順が異なると言われる。

(19) Die Kinder sahen den Film.

the children saw the film

'The children saw the film.'

(20) ... daß die Kinder den Film gesehen haben

that the children the film seen have

'.. that the children have seen the film.'

(Vikner 1995: 41-42)

主節では (19) のように SVO の語順をとり、従属節では Comp-SOV の語順をとるのが一般的である。ドイツ語の主要部パラメタの値を決める場合 SVO と SOV のどちらにするか議論の分かれるところではあるが、ドイツ語は (21) に見られるように SVO 言語一般が持つ語順を備えていることから、基本的には SVO と考える方が妥当だと思われる。¹²

¹² 吉田 (2002) は (α) に挙げた事実から、ドイツ語の主要部パラメタとして (β) を提案している。

(α) (a) VP die Stadt **zerstören**

the city destroy

'destroy the city'

(b) AP einer Sache **bewusst**

something aware

'aware of something'

(c) NP die **Frau** des Professor

the wife (of) the professor

(d) PP **mit** dem Computer

with the computer

(太字は各範疇の主要部を示す)

(β) (i) [+V] 素性の V, A は主要部末尾型, (ii) [-V] 素性の N, P は主要部先端型

(V=[+V,-N], A=[+V,+N] / N=[-V,-N], P=[-V,-N])

本論文では VP と PP 内の語順についての説明は与えたが、AP, NP については触れていない。吉田 (2002) による素性間のパラメタも考慮に入れながら今後考えていきたい。

(21) a. CP: C -- IP

[_{CP} [_C⁰ daß] [_{IP} die Kinder den Film gesehen haben]] (=20)

b. Relative Clause: RC-Head -- RC-Modifier

Er kennt [_{DP} die [_{RC-Head} Frau] [_{RC-Mod} der Maria das Geld schuldet]]

he knows the woman who Maria the money owes

'He knows the woman who Maria owes the money.' (McCray 1981:206)

c. PP: P -- NP

Wer inszenierte [_{PP} [_P⁰ in] [_{NP} London]] den "Figaro"?

who staged in London the Figaro

'Who staged "Figaro" in London?' (Grewendorf 1993: 1288)

(21a-c) のドイツ語と各英語訳を比較するとわかるとおり, SVO 言語である英語の語順とはば一致する。よってドイツ語は EPP(I) 言語であると考えられる。

ドイツ語が SVO 言語だとすると従属節内の SOV の語順はどのように派生されると考えれば良いのだろうか? 従属節 (22) は (23a-e) の派生を経て生成される。

(22) [_{CP} daß [_{IP} Subject Object V]]

(23) a. [_{VP} Subject [_V V Object]]

b. [_{IP} I [_{VP} Subject [_V V Object]]]

c. [_{IP} V+I [_{VP} Subject [_V *t_V* Object]]]

d. [_{IP} [_{VP} Subject [_V *t_V* Object]] [_{I'} V+I *t_{VP}*]]

e. [_{CP} daß [_{IP} [_{VP} Subject [_V *t_V* Object]] [_{I'} V+I *t_{VP}*]]]

LCA に従い (23a) から派生が始まる。(23b) の段階で V が I に主要部移動 (head movement) する。(23c) の残余 VP (remnant VP) が Spec-IP に移動し (23d) ができる。¹³ C⁰ と併合して従属節が完成する (23e)。¹⁴ この派生の中で問題にしたいのは Spec-IP への VP 移動である。第 2 節で見た日本語における同様の移動の動機は EPP (II) であった。しかしドイツ語の場合

¹³ ドイツ語の IP 内の構造 (23d) は日本語の構造 (7b) と類似している。そのために両言語はいくつかの特性を共有する。

まず英語では (i-b) のような *that*-痕跡効果を示すが, ドイツ語・日本語にはこの効果は現れない。

(i) a. Who_i do you think that John loves *t_i*?

b. *Who_i do you think that *t_i* John loves?

(ii) a. Wer glaubst du, fährt *t* oft nach Paris?

who think you goes often to

b. Wer glaubst du, daß *t* oft nach Paris fährt?

who think you that often to goes

'who_i do you think (that) *t_i* goes to Paris?'

(Vikner 1995: 13)

(iii) a. 誰が_i [太郎は [_{CP} *t_i* そのりんごを食べた [_C⁰と]] 思っている] の?

b. 何を_i [太郎は [_{CP} 花子が_i *t_i* 食べた [_C⁰と]] 思っている] の?

はEPP (II) による移動とは考えられない。何故ならドイツ語の他の範疇ではEPP (II) による移動が起こらないからである。例えば (23e) のようなCPにおいて、(24) のようにIPをSpec-CPに移動することは不可能である（なお、EPP (II) 言語である日本語では(24) のような構造が許される (cf. 7a)）。

(24) *_{[CP [IP Subject Object V+I] [C⁰ daß t_{IP}]]} (IP内部の構造は省略)

よってSpec-IPへのVP移動の動機はEPP (II) 以外にあると考えざるを得ない。¹⁵ さらにこの移動には普遍的な規則というよりむしろドイツ語の個別言語内の規則が関与している可能性が高いと考えるべきであろう。何故ならドイツ語と系統的に近い言語である英語においてさえ、同様の移動は容認されないからである。

詳しい説明は他に譲るが、主語の占める構造上の位置が英語とは異なっていることが原因だと思われる。

次にドイツ語では主格の照合 (checking) は必ずしもIP-Specで行われていないことが (iv) からわかる。

(iv) a. weil Peter dem Studenten das Buch gab
since the student-Dat the book-Acc gave
'since Peter gave the student the book'

b. weil dem Studenten das Buch gegeben wurde
since the student-Dat the book-Nom given was
'since the book was given to the student'

(cf. weil das Buch dem Studenten gegeben wurde) (Grewendorf 1993 : 1304)

(iv-b)で受動化された主語*das Buch*は、IP-Specへの移動を起こさずに主格が照合されていると考えられる。日本語にも (v) のように主語「英語が」が、IP-Specへの移動無しで主格を照合されている例がある。

(v) 太郎に英語がわかる。

以上挙げた類似点はドイツ語と日本語のIP内部の構造が類似していることから説明が可能となると思われるが、詳しい説明は他の機会に譲らねばならない。

¹⁴ ドイツ語の主節は (23d) の構造から以下のように進むと仮定する。

(23d) [_{IP} [_{VP} Subject [_v t_v Object]]] [_r V+I t_{VP}]]

(i) a. [_{CP} C [_{IP} [_{VP} Subject [_v t_v Object]]] [_r V+I t_{VP}]]

b. [_{CP} [_{C⁰} V+I] [_{IP} [_{VP} Subject [_v t_v Object]]] t_v+I t_{VP}]]

c. [_{CP} Subject [_{C⁰} V+I]] [_{IP} [_{VP} t_{Subject} [_v t_v Object]]] t_v+I t_{VP}]]

c'. [_{CP} Object [_{C⁰} V+I]] [_{IP} [_{VP} Subject [_v t_v t_{Object}]]] t_v+I t_{VP}]]

主節のCPの主要部 (C⁰) は空 (empty) であり、そこにV+Iが主要部移動する。(23e) のように補文化辞 (*daß*) 等がある場合にはこの移動は不可能である。) さらにCP-Specに何らかの構成素が移動する。主語が移動した例が (i-c) であり (このときSVOの形をとる)、目的語が移動した例が (i-c') である。

なお (i-c) (i-c') はドイツ語の特徴である「動詞第2位」現象 (主語、目的語、副詞等の要素が一番目を占め、定動詞が2番目を占める) を上手く捉えている。

¹⁵ ここでは移動の原因はVPの焦点化 (focusing) によるものだとしておく。VP移動に焦点化が絡むというアイデアは、既にYanagida (1996 : 294) で提案されている。Yanagidaは日本語において (i) のようにCの持つfocus素性がVPのSpec-CPへの移動を駆動すると主張している。

(i) [_{CP} [_{VP}...], [_{T+C}] [_{TP} t_i]]

Yanagidaの日本語の分析は本論文でのそれとは相容れないが、上述のアイデアをドイツ語の分析に適用することは十分可能であろう。つまりドイツ語ではIがfocus素性を持ち (23c) でV+IがVPをSpec-IPへ駆動すると考える。

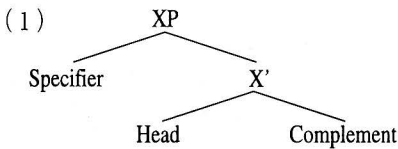
- (25) a. John wanted to win the race, and [IP [VP *t*_{he} win the race] [IP he did *t*_{VP}]].
 b. *John wanted to win the race, and [IP [VP he win the race] [I' did *t*_{VP}]].
 c. *John wanted to win the race, and [IP [VP he *t*_{win} the race] [I' won *t*_{VP}]].

英語には VP 前置 (VP-fronting) という移動規則があり, (25a) のように VP (win the race) を前置し IP に付加することは可能であるが, (25b,c) のような VP を Spec-TP に移動することは許されない。EPP (I) 言語でありながら (23d) を許すドイツ語は, IP 内においてのみ個別言語の規則が EPP パラメタに優先すると考えることで説明できる。

以上, EPP (II) によらない Spec-TP への VP 移動の例を見てきた。3.1 節の IP 移動の場合と同様, 個別言語の文法の影響を強く受けて語順が決まる場合があることを確認した。

4. 普遍文法のパラメタと個別言語の文法規則

第 1 節で述べたように, 人間の言語能力—特に基本語順の習得に関する能力—には非常に制限的であるが選択の余地を残すメカニズムが含まれているはずである。本論文では「非常に制限的」な (1) の構造を人間言語が普遍的に持っているとは仮定した上で, 「選択の余地を残すメカニズム」として EPP パラメタ (4) を導入した。



(4) EPP: 機能範疇の Spec を埋める 2 つの形式

- a. EPP (I) : relevant な素性を X^0 に持つ XP を Spec に移動 (Move),
 あるいは併合 (Merge) する。…………… (英語等の SVO 言語)
 b. EPP (II) : complement を Spec に移動する。…………… (日本語等の SOV 言語)

個別言語は「初期設定」(1) の状態から EPP パラメタの値に応じた移動・併合操作を経て生成されるが, この過程は普遍文法のメカニズムの一部をなすと考えられる。一言語内の全ての機能範疇の EPP の値が一定であるという点において, 英語や日本語等はこの過程から出てくるもっとも典型的な言語であると言える。¹⁶ 他方台湾語やドイツ語は一部の機能範疇の EPP の値が他と異なっているように見える。¹⁷

¹⁶ 長谷川 (2002: 52) には以下のような記述がある。(なお引用文中の番号は本論文の番号に対応するよう直してある。)

(i) 「(前略) UG で基底される (1) を『評価の尺度』と見なし, これに適った句構造規則は (中略) 無標ないし規則的であり, 言語習得上のコストがゼロであると考ええる。」

本論文も基本的に (i) を受け入れる。さらに (i) を拡張し (ii) のように考えたい。

「問題となる」言語群を説明する方法として少なくとも2通りの可能性がある。すなわち、(a) 一つの言語内でEPPの値は機能範疇毎に異なってもよい、(b) EPPの値は一定に保たれているが、ある機能範疇だけに個別文法の規則が優先するためにEPPの値が異なっているように見える。人間の子供が成長の比較的早い段階で、しかも少ない経験から言語を習得することを考えると(b)の方が望ましいと思われる。つまり第3節で見たように台湾語はEPP (I) 言語であるが、CP-SpecへのIP移動だけがEPPによる移動ではなく個別文法規則によるものであり、同様にEPP (I) 言語であるドイツ語においてはIP-SpecへのVP移動だけが個別文法規則によるものであると主張する。

最後に、本論文で意味する「個別文法規則」について言及する。ある言語Aにおいて、Aのみが持っている文法規則を「個別文法規則」と呼ぶのはもちろんのこと、その他の言語B,CがAと規則を共有する際にもその規則を「個別文法規則」とみなすことにする。例えば台湾語のIP移動と同様の移動が他の言語に見られても本論文ではそれを「個別文法規則」と考える。¹⁸

このような仮定は、(26)のような新たな観点からの研究を促すばかりでなく、(27a,b)で示されたような手順で普遍文法の中身に迫っていけるという点で有意義だと思われる。

- (26) たとえ系統的に無関係の言語群であっても、ある「個別文法規則」を共有するという点でグループを形成でき、新たな類型から言語の普遍性と個性の発見を促す。
- (27) a. 「個別文法規則」にもある種の傾向があることが発見できれば、その傾向は普遍文法から影響を受けた可能性が高い。
b. 特定の「個別文法規則」が多く言語で見つければそれだけ、その規則が普遍文法の一部をなす可能性が高い。

(ii) (4) によって派生される構造が無標ないし規則的であり、言語習得上のコストが少ない。

ここで重要なのは、UGで規定される原理・原則をきちんと押さえた上で不規則な(例外的な)現象を個別言語の特性として説明していく研究上の戦略であろう。長谷川(2002)では(1)を普遍文法の『評価の尺度』と見なした上で、個別言語の句構造規則を設定し個別言語の持つ特性の一部を明らかにすることを試みている。一方本論文ではEPPパラメタの他に個別言語の文法規則を認めることにより普遍文法と個別文法の「かわり方」を追求している。

¹⁷ (標準) 中国語も主要部パラメタにとって問題となる言語の一つである。例えば関係節内では主要部末尾(head-final)であるが動詞句内では主要部先頭(head-initial)である。

(i) a. [_{NP} 我 親見 的 人]

私 見る(補文化辞) 人

「私の見た人」

b. 我 [_{VP} 親見 了 他]

私 見る(完了) 彼

「私は彼を見た」

(Whitman 1998:110)

(i)の事実は、従来の主要部パラメタでは説明が困難だと思われるが、EPPパラメタの観点から分析し直すと、原理的な解決の可能性が残ると思われる。その可能性の一つとして本田(2002)の分析がある。

¹⁸ Simpson and Wu (2002: 67-68) では、SVO 言語でありながら本論文で考察した台湾語のような文末表現をする言語があげられている。しかしそれらすべてを同一現象と見るか否かは今後の研究によって明らかにされるべきであろう。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," in Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step*, MIT Press, 89-155.
- Grewendorf, Günther (1993) "German," in Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld and Theo Vennemann, (eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research* Vol.2, 1288-1319.
- 長谷川欣佑 (2000) 「第 I 部 総論」長谷川欣佑・河西良治・梶田幸栄・長谷川宏・今西典子『文 I』研究社 1-225.
- 原野昇 (1993) 「フランス語の文末周辺」藤原与一 (編)『言語類型論と文末詞』三弥井書店 5-19.
- Honda, Kensuke (1999) *Universal Word Order and Language Variation: A Case Study in Comparative Syntax*, Ph.D. dissertation, Dokkyo University.
- 本田謙介 (2002) 「反対称性仮説から見た日本語統語論」筑波大学現代言語学研究会 (編)『次世代の言語研究 I』175-224.
- 本田謙介, 市川一裕, 井上知子, 柚木一彦, 砂見聡 (1996)「日本語の関係節構造」『日本言語学会第112回大会予稿集』29-34.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) "The Position of Subjects," *Lingua* 85, 211-258.
- McCray, Alexa T. (1981) "Clause Initial Elements in German," *Papers from the Seventeenth Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society* 17, 205-220.
- Ross, John Robert (1973) "Slifting," in Maurice Gross, Morris Halle and Marcel-Paul Schützenberger (eds.) *Formal Analysis of Natural Languages*, Mouton, 133-172.
- Simpson, Andrew and Zoe Wu (2002) "IP-Raising, Tone Sandhi and the Creation of S-Final Particles: Evidence for Cyclic Spell-Out," *Journal of East Asian Linguistics* 11, 67-99.
- Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press.
- Whitman, John (1998) 「語順と句構造」竹沢幸一・John Whitman『格と語順と統語構造』研究社, 104-195.
- Yanagida, Yuko (1996) "Deriving Surface Word Order in Discourse Configurational Languages," *MIT Working Papers in Linguistics* 29, 283-302.
- 吉田光演 (2002) 「ドイツ語の語順に関するパラメタをめぐって」口頭発表ハンドアウト, 日本独文学会 2002年度春季研究発表会シンポジウム『ドイツ語の統語パラメタを求めて-多様性を生み出す原理』, 於: 獨協大学.

(ほんだ けんすけ 本学非常勤講師)